

ホタルよ、  
福島に  
ふたたび

阿部宣男  
*Nobuo Abe*

ホタルの輝きは希望の光

アスペクト

ホタルよ、  
福島に  
ふたたび  
の輝きは希望の光

阿部宣男  
*Nobuo Abe*

アスペクト



9784757221123



1920095015002

ISBN978-4-7572-2112-3

C0095 ¥1500E

定価： 本体1500円 + 税

アスペクト

乙第 / 男証

人魂ひとたまのような光を放つ虫。

蚊帳かやの中で一晩中光り続け、私におもらしをさせた虫。

それをこの手で育てるなんて、できっこない。しかし、公務員である私に選択権はありません。

「阿部くん、これは区議会で決まったことだからね。つまり、区民58万人（当時）の代表が集まって話し合った結果なんだ。一個人の好き嫌いで判断していいことではないんだよ。それでもどうしてもやりたくないと言うならば、この仕事を辞めるしかないじゃないか。もし、やってみてうまくいかなければ、それでもかまわない。難しいだろうことは、ある程度わかっているんだから。とりあえず取り組んでみてくれよ」

と、課長に説得され、私は引き受けざるを得なくなりました。

憂鬱な気分に加えて、ホタルを飼育するといっても具体的に何をすればいいのかも皆目見当が付きませんでした。まずホタルについての知識が、「ご先祖さまの生まれ変わり」以外にない。

ホタル関連の本を書店や図書館で探してもみましました。けれど、ゲンジボタルとヘイケボタルの特徴の違いなど基本的なことはわかったものの、飼育のための目ぼしい情報はほと

んど得ることはできませんでした。

（第一、ホタルつてどこに行けば手に入るんだろう。熱帯魚みたいに店に行けば買えるものでもないし……）

結局、私には福島県の熊川しか思い浮かびませんでした。

当時、祖母はもう亡くなっていたので、大熊町に住む叔母に連絡をし、様子を聞いたところ「ああ、今の時期はゲンジボタルが飛んでいるよ」とのこと。私は当時、小学2年生だった長男の一也に声をかけました。

「学校が夏休みに入ったら、お父さんと一緒に熊川に行かないか？」

一也もこれまで何度も熊川には行ったことがありました。もちろん、ホタルが飛ぶ姿も見ています。彼は「行きたい、行きたい」とその場で飛び跳ねました。

息子を連れて行こうと思った理由は明白です。一人でホタルと対峙する勇気がなかったのです。

夏休みが始まり、私たちは福島へと向かいました。

目指すはホタルの卵の採取。成虫を捕まえて持ち帰るなんてことは、怖くてとてもできないと思っただからです。事前に町役場には事の次第を説明し、卵とホタルのエサになるカ

ワニナを持ち帰る許可はもらっています。

到着した日の夜、息子とともに熊川に向かいました。……いました。相変わらず、不気味な青白い光を放って、水辺の草むらにホタルが飛び交っています。つないでいた息子の手をギュッと握りしめる私。

(大丈夫。一也がついているんだから、怖くないぞ)

自分に言い聞かせます。まったくどつちが保護者だかわかったものではありません。

ホタルが舞う一帯の川岸を目を皿のようにして見回し、土の上に光る物体がないか探します。あれば、それが卵です。ホタルが成虫だけではなく卵も幼虫も光ることは、数少ないホタル関連の本から知識を得ていました。

しかし、その晩は結局見つけることはできませんでした。

2日目も搜索は続きます。私は必死でした。卵が採取できないとなると、成虫を捕まえて持ち帰らなければならなくなる。それだけはなんとしても避けたい……。

川の中に入り、そこから川岸を見渡す作戦に出ました。一也を背中におぶって、川の中をゆつくりと歩きながら、視線を土手に向けて目を凝らします。

やはり、見つかりません。「今日もダメかもしれない」と諦めかけたそのとき、

「お父さん、あそこで何か光ってるよ!!」

と、一也が指をさしました。確かに、ボォッと光を放つものが見えます。

急いで近づいてみると、コケの上に数の子のような黄色いツブツブしたもののがびつしりとあり、その上にホタルが1匹止まっていました。おそらく、産卵をしているさなかだったのでしょう。

「これだ。これがホタルの卵に違いない」

私はそつとコケのついた石を持ち上げ、あらかじめ用意していたプラスチックケースに入れました。

その晩のうちに卵と前日にすでに採取してあったカワニナを手に、私たちは東京へ戻ったのです。

翌朝、出勤した私は『温室植物園』の冷房室にある湿地帯部分にホタルの卵を置き、カワニナは水中に放しました。

卵の数がどれくらいあるのか、まったくわかりませんが、当時一緒に働いていたスタッフの中にもすごく几帳面な人がいます。彼が一生懸命数えてくれて、300個ほどであると判明したのです。

8月にはヘイケボタルの卵も手に入れることができました。こちらは栃木県の栗山村（現・日光市）のものです。栗山村は板橋区と「緑と文化の交流」を目的に姉妹都市の関係を結んでいました。

栗山村に連絡すると、「平家塚のある湿地帯にヘイケボタルがたくさん飛んでいる」とのこと。早速、出かけて行き、当時の企画係長と卵を採取。カワニナやタニシと一緒に持ち帰り、やはり冷房室に置いたのです。こちらの卵は700個でした。

役所に結果報告をし、念のために課長には「これがホタルの卵ですよ」と、見せたところで任務終了――。

私はそのつもりでいました。卵の写真を撮ることはしなかったし、もちろん世話なんか一切しません。飼育方法なんてまったくわからないのですから。それどころか観察することもなかった。置きっぱなしの状態です。ホタルなんかとは極力関わらなくなかったですから当然です。

正直、うまく育つわけなどないと思っていました。当時からホタルの飼育はとても難しいと言われていたからです。しかも私はホタルについて何も知らない素人。これで万が一、無事に生まれて育ったら、それはもう奇跡と呼ぶほかありません。何よりホタルなんて見

るのも嫌な私には、育ってしまったては都合が悪いわけです。

ところが、皮肉なものですねえ。何の因果か、その奇跡が起こってしまったのですから。

## ホタルが飛んでいる!!

年が明けた1990年の3月。

私は毎日、植物や生き物たちの世話に追われていました。はつきり言って、ホタルのこ

となどほとんど忘れていた頃、ある人物が私を訪ねて来ました。

須田孫七<sup>すだまなち</sup>さん。もともとは高校の生物の先生で、昆虫学者として有名な方です。

「ここにはホタルがいるんですね」

との須田さんの言葉に、私の思考は一瞬停止しました。

（ホタル？ ホタルって……何のことだ？）

それほどホタルの存在は希薄になっていたのです。寝耳に水の状況の中、私は極力平静を装い、「ええ、いるんですよ」と答えました。まさか職員である私が「そんなはずがない」なんて、口が裂けても言えませんかね。

(これだけ大盛況だったのだから、きつと「来年もやつてくれ」と言われるに違いない)『ふれあいの夕べ』を続けること自体は賛成でした。ただし、私が関わるのもうごめんだったのです。

課長に「元の職場の『こども動物園』に異動させてもらえないか」と、頼みました。しかし、返答はすげないものでした。

「ここに異動してきてたつた1年じゃ無理だよ。せめて5年はいてもらわなきゃ」

ということは、5年もホタルとつきあわなければならないのか……。私はガックリと肩を落としました。

### ホタルのための生態水槽をつくる

初年度に羽化したホタルの数は、ゲンジとヘイケ合わせて450匹ほどでした。偶然とはいえ、冷房室の環境がホタルの生育にほぼ適していたのでしょう。今思えば、卵のときからあれこれ手を加えず放つておいたのもよかつたのだと思います。私のホタル嫌いが功を奏したわけです。

しかし、今後もホタルさんが育ち続ける保証はありません。『ふれあいの夕べ』を行うからには毎年、それ相応の数を羽化させなければなりません。私は「きちんとホタルを飼育する方法を考えよう」と、腹をくくつたのです。

まずは卵を採取するところから始めました。アイディアマンのスタッフが、「水槽にガーゼを敷いて、その上で産卵させれば卵は黄色いからわかるんじゃないか」との案を出してくれました。彼は生き物全般の知識が豊富だったのです。

自然の中に生息するホタルは川岸などの湿地帯に卵を産みつけます。そこでガーゼを少し湿らせておくことにもしました。

水槽の準備を整えたら、次は冷房室にいる成虫を捕まえてきて産卵させなければなりません。これがまあ、私にとってはつらい作業だった。大嫌いなホタルと至近距離で接しなければならぬのですから。おまけにどれがメスだかオスだかもわからない。

「とにかく網で捕まえて水槽に入れちゃえ」

とばかりにヘイケとゲンジを捕獲し、それぞれを分けて、用意した5つの水槽に入れてみました。

ほどなくして、水槽内に黄色いツブツブの卵を発見。

「パーセンテージを出せと言われても……。ただ、私の言うことをきちんと守ってさえくればゼロにはなりませんよ」

「それでは困るんです」

「いや、こつちこそ困っちゃいます。うちの施設の例を挙げれば、100万匹の幼虫がいたとして、成虫になるのはゲンジボタルで最大6000匹、ヘイケボタルで1万5000匹くらいですから、2・1パーセントといったところでしょうか」

「それは少なすぎますよ!」

「あくまでもこの施設の数字です。この『せせらぎ』はたつたの18メートル、湿地帯を入れても21メートルしかありません。研究所の敷地につくる予定の『せせらぎ』は100メートルだから結果も違うはずですよ。むしろそちらのほうが羽化率は高くなるかもしれませんし」

「じゃあ、自然界ではどうなんですか。どれくらいの確率で羽化するんです?」

「0・05パーセントくらいですね。施設のほうが遥かに確率が高いんですよ」

「……。いやあ、でもやっぱり少ないですよ」

もう押し問答の繰り返しです。正直、一瞬はさじを投げてしまいたくなかったけれど、せつかくホタルさんの新たなすまいができる機会を、私がなくしてしまうわけにはいきません。なんとしても納得してもらわなければならなかった。

私は粘り強く、一生懸命訴えました。

「ホタルさんが育つかどうかは環境はもちろん、その年の天候によっても大きく左右されるんです。だから具体的な数を一概に言うことはできませんが、6月、7月になればぎつとホタルさんを楽しめます。研究員のみなさんを癒やしてくれると思いますよ」

私の言葉にトーンダウンはしたものの、まだ納得しかねている様子でした。

そこでこうお話ししたのです。

「ホタルさんを再生させるには、見守るといふ姿勢が大切なんです。お金をかける前に、一番かけなくてはいけないのが心です。愛情と心がなければ、ホタルさんはすぐに見破りますよ。そうしたら、『誰が光を見せてやるもんか』ってならないとも限らない。もう一度、よく考えてみてはくれないでしょうか」

その後、彼らは私が再生事業を行った場所を5か所ほど見て回ったようです。地元の人にも話を聞いたみたいですね。そこでどんな会話があったのかはわかりませんが、結果的に納得してもらいました。そして、ようやく工事に取掛かることができたのです。

働きもします。

流れの大本に置く骨炭は、アンモニアや亜硝酸などのよくない成分を吸着するのに最適です。骨炭は牛の骨からつくられたもので、古くから砂糖の精製に使われているものです。

水族館などでは濾過材として活用していたんですよ。通常はヤシガラを使用するのですが、1か月もしないうちに効果を失ってしまう。その点、骨炭は3年は持続するのもメリットでした。

初めて存在を知ったときは、「本当に濾過能力が高いのか？」という疑問があった。となると、『実験好き』の血が騒ぎます。

(有機物を分解するのなら、臭いだつて消してくれるはず)

そう考えた私は骨炭を入れたビニル袋におならをして、臭いを嗅いでみました。そして、とんでもなくクサイ。

(なんだ、全然吸着しないじゃないか。いや、待てよ。もしかしたらかき混ぜないとだめなんじゃないか?)

再実験の結果、消臭効果ありと判明しました。

ばかばかしいと思われるかもしれませんが、これもホタルさんのため。私はそう信じているのですが……。

濾過材の中には独自に開発したものもあります。たとえば、『多機能バイオ用土』。ホタル飼育のための生体水槽をつくった当初は、11種類の土や砂、石を使っていました。毎回それだけの数を使うのは大変じゃないですか。そこで「できるだけ簡素化しつつも効果を発揮するものを」と考えた結果、完成したんです。同様に『蛍埴土』や『上陸安定土』なんかも開発していききました。

まだまだ完成ではありません。生き物を相手にしている限りは「もうこれくらいいいだろう」という考えはない。工夫できる余地はいくらでもあるはずですよ。

『多機能バイオ用土』と『蛍埴土』を一体化できれば、その分コストを下げることも可能です。費用が少しでも抑えられれば、ホタル再生をやりうという人たちがもつと増えるかもしれません。だからこそ私は今でも日々、研究を続けているのです。

再生現場に行つた際に重要なのは、『場所』を決めることです。依頼主から「この川にホタルが育つ環境をつくりたい」と言われたとしても、川全部に施すのはまず無理です。予算が限られていますからね。大抵はその一部で環境づくりに取り組むこととなります。

大切なのは、どの部分を選ぶかです。周囲の自然なり風景と調和させることも必要ですが、私は「磁場」を大切にしています。いわば、その場所から発せられるエネルギーのよいうなものです。

神経を集中して磁場を感じていると、必ず「ここだ」と思える場所があります。自然が教えてくれているのだと思うのです。これが非常に重要。理屈では説明できないのですけれどね。

私が黙ってジツとしていると、依頼元の人たちは何をしているのかと思うわけですよ。場所を移動すれば、ゾロゾロと後をついてくる。「頼むから一人にしてくれ!!」なんて思ったりします。

磁場を感じたら、イメージを思い浮かべます。目を閉じると夜の光景がまぶたに映る。その中にホタルさんが舞っているかどうか……。イメージが浮かばない場所であれば、環境づくりはできません。

また、既存の河川でも新しく水路をつくる場合でも大切なのが、水の通る道です。私は「水道」と呼んでいます。水つて一定の量が一定の力で流れるわけではないんです。必ずここを通った水は、全体にうまく行き渡るといふポイントがある。そこを把握するのも

私の役目です。

しかし、私には「ホタルさんのための環境づくりを自分がやっている」という意識はありません。すべては自然にお伺いを立て、自然の力を借りて初めてできることなのです。行ってきた再生事業が一つとして失敗していかないのは、私の努力や技術なんかじゃない。自然のあるがままに取り組んだがゆえに、受け入れてくれたのだと思っています。

もちろん、自然は私たち生物にやさしいばかりではありません。ときには抗いような脅威を見せつけます。

あの未曾有の大震災のように――。



ホタルよ、<sup>ふくしま</sup>福島にふたたび  
ホタルの輝きは<sup>かがや</sup>希望の<sup>きぼう</sup>光<sup>ひかり</sup>

2012年8月3日 第1版 第1刷発行

著者 阿部宣男

発行人 高比良公成

発行所 株式会社アスペクト

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-18-3 錦三ビル3F

電話 03-5281-2551 FAX 03-5281-2552

ホームページ <http://www.aspect.co.jp>

印刷所 中央精版印刷株式会社

\*本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

\*落丁本、乱丁本は、お手数ですが弊社営業部までお送りください。送料弊社負担でお取り替えます。  
\*本書に対するお問い合わせは、郵便、FAX、またはEメール [info@aspect.co.jp](mailto:info@aspect.co.jp) にてお願いいたします。お電話でのお問い合わせはご遠慮ください。

©Nobuo Abe 2012 Printed in Japan

ISBN978-4-7572-2112-3